
三題噺から『無題』

麻生 閃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三題噺から『無題』

【Nコード】

N2306A

【作者名】

麻生 閃

【あらすじ】

掲示板で話題になった、三題噺に便乗し作ってしまいました。

三題噺・御題《風船・時計・夜空より》
『無題』

『夏澄。誕生日には何が欲しい?』

『どうしたの、突然。今まで聞いた事無かったのに』

『いいから。あくまで参考だよ』

『…………じゃあ、手紙かな。祐介君直筆の手紙』

『それだけ?』

『んーと、後はね……………』

自宅の二階。

僕の部屋の窓からは、星が綺麗に見える。

僕は窓を開け、上半身を夜風に当てる。

冷たく、緩かな風が僕の髪を乱した。

「もうそろそろ、か」

僕は体を部屋に引っ込めて、時計を見た。

只今の時刻、11時30分。

彼女の誕生日まで、あと少し。

11時34分。

僕はプレゼントを用意する。

君の20歳の誕生日、普通だったら指輪とか、鞆とか、洋服とか。そういうのをあげるべきかもしれない。

でもゴメン。今の僕には、そんなお金がないんだ。

だから代わりに、君が本当に欲しいものをあげることにするよ。

11時36分。

僕は手紙を読み直す。

案の定、君が欲しいと言ったのはブランド物の鞆でもなく、美しい宝石が付いている指輪でもなく、僕の直筆の手紙が欲しいと言った。今の時代はあまり手紙を使わない。メールを使えば直ぐに届くはずなのに。

3

『でも手紙なんかが欲しいんだ？今の時代携帯だってあるのに』

『メールじゃ駄目なの。メールじゃ、祐介君が伝わらない。見ただけで、祐介君だって分かる物がいいの』

確かに君は、今の時代では珍しく、あまりメールを使わなかった。

理由は、僕と話している実感がないから。

僕は初めて君宛てに書いた、三行半の手紙を見直す。大きく目立つ、余白の白。

やっぱり、もう少し沢山書けば良かったかな。

もし君が、もっと長い手紙が良いなら、次は頑張って沢山書くよ。だから今回は、これでゴメン。

11時42分。

僕は封筒を探す。

しまった。封筒が無い。

机の上に置いたと思うんだけど。

ああ、あった。

ベットの近くの机の上。

君がくれた、置き時計の下に。

『祐介君。少し早いけど、お誕生日おめでとう。はい、これプレゼント』

『ああ、有難う。これ、置き時計？』

『うん。祐介君時計壊れた、って言っていたから。………いらなかった？』

『いや、全然。ちょうどよかったよ。本当に、有難う』

君がくれた、四角い青の置き時計。

貰った時は、本当に嬉しかった。

どこにでもある、シンプルなデザインの時計。

くさい事を言うようだけど、僕にとってこれは、かえがたい宝物だ。たとえ、今は時を刻んでいなくとも。

11時50分。

僕はプレゼントをまとめる。

真っ白な封筒に入れるのは、余白が多い三行半のつたない手紙。

僕は綺麗に折り畳み入れた。

もう一つ、プレゼント。

君と同じ名前の、花の種。

『あとね………そうだ！花、綺麗な花が欲しい』

『花って年の数だけの薔薇の花とか？』

『違う。カスミソウの花が欲しいの』

『……………夏澄、だからか！アハハハ！』

『ひっ、酷い！笑わないでよ！もー、これでも一生懸命考えたんだから』

僕は、昨日花屋で買ったカスミソウの花の種を入れた。

本当は、花を買いたかったよ。

でも、君の場所まで届かないから。

「これでよし。」

11時55分。誕生日まであと5分。

僕は封筒を風船に結ぶ。

今日貰った、天井に頭をつけて浮いている、鮮やかな黄色の風船。ちゃんと選んだんだよ。

赤や、青じゃ駄目なんだ。

この色なら、きっと君も見付けられる。

僕は紐をたぐり寄せ、封筒に巻き付けた。取れないように、テープも付けておこう。きつと、届く。

11時57分。君の誕生日まであと3分。

僕は窓から顔を出す。

風船を片手に持ち、夜空を見上げた。

都会では珍しく、星が沢山出ていた。

そういえば、明日は七夕だったな。

『でもなんか運命って感じがしない？お互いが同じ誕生日、しかも

七夕なんて』

『そうか？僕は偶然だとは思えないけど』

『冷めてるな』祐介君は。織姫と彦星みたいだっ！とか思わないの？』

『嫌だよ、そんなの』

一年に一度しか会えないなんて、辛すぎるじゃないか。

叶わない夢だつて分かっていた。
でも、現実を受けとめられなかった。

君は元々、体が弱い方じゃなかった。
外に出る事も許されず、病院で空を見ている事しか出来なかった。
毎日見舞いに来ていた僕に、ある日君は言った。

『祐介君。私、祐介君が彦星で、私が織姫だったら良かったな、
と思うの』

『何でだよ。一年に一度しか会えないじゃないか』

『……それでも。それでも、会えるからいいじゃない』

その3日後、君は息を引き取った。
不思議と、涙は出なかった。

出なかったじゃない、出尽したんだ。

僕は、この時が来るのを分かっていた。

君と出会った時から。

君が長くない事を知ってから。

僕は、涙を流していた。

11時59分。君の誕生日まであと1分。
僕は風船を外に出す。

黄色の風船は、黒い夜空によく映えた。
良かった、これなら君も見付けられる。

君が空に居ないなんて事は分かっている。
けど、こうでも思わなきゃ、僕は。

誕生日の日、君は空に戻ってしまった。まるで織姫のように。
ただ一つ、伝説と違うのは、僕らはもう会えないこと。
どれだけ時が過ぎても。

どれだけ季節が廻っても。
きっと。必ず。
でも、でも僕は。
僕は。

12時。手元の携帯のアラームが鳴る。
アラームを止め、僕は風船を手放した。
ゆっくり、ゆっくり風船は空に上っていく。

夏澄へ。

お誕生日おめでとう。

僕は君を失って、3回目の誕生日を迎えました。

變する夏澄へ。

（後書き）

カスミソウの種って売れてるのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2306a/>

三題噺から『無題』

2010年12月25日14時33分発行